
国語教育と外国語教育の視点から見た英文字指導の課題

— 新小学校学習指導要領を踏まえて —

内田 富男

1. はじめに

小学校における教科・外国語（英語）が高学年から始まり、それに伴い外国語活動が中学年に前倒しされる。これは単に小学校の教育課程に英語が導入されるという変化に留まらない。初等教育中期から前期中等教育まで義務教育の7年間を通して英語教育が実施されることを意味する。無論、小学校では日本人の母語である日本語で全教科を指導することになっている。カナダのように公用語として二言語使用や二言語教育を規定することではない。ただし、明治期から国際化の動きとして英語公用語化の運動は幾度もあり、現在でもグローバル化への対応としてそうした声も一部にはある。

こうした大変革のなかで、未だに賛否両論に分かれ激しい議論を展開しており、小学校教育の現場は混乱しているという指摘は少なくなく、開始前から廃止論（毎日新聞 2017）まで飛び出している。一方で、文部科学省をはじめ推進派、賛成派の識者、関係者は本格実施に向けて、移行措置期間前に体制を整える準備をしている。人事、教育課程、教材等、急ピッチで準備を進めて、企業経営における自転車操業といった感じも否めない。

しかし、英語の教科化に当たっては英語教育関係者主導の準備態勢と小学校側に問題があると言わざるを得ない。日本の小学校の特徴である学級担任制のよさが生かされた準備になっていない点を指摘したい。小学校では、全教科を原則的に学級担任教師が担当することになっているが、中学校や高等学校では全教科を担当することはなく、英語科教員は他の教科については無知であり、教科間連携もうまくいっていない。一方、小学校では、例えば、国語教師と英語教師は、同じ学級担任である。学級担任は児童との関係が密であり、学級の児童を熟知しているはずで、学級経営、全教科、児童指導の責任があり、教育課程全体や児童ひとり一人を見て、運営することができる。

本論では、学級担任が行う国語教育と新しい英語教育における、文字指導、特に英文字（ローマ字と英語で使われる文字）、に注目して、学級担任制の特長を生かす英文字指導について考える。

2. 日本語におけるローマ字と小学校教育

2.1 ローマ字使用の現状

小学校におけるローマ字教育について述べる前にまず、日本語の書記言語におけるローマ字について確認しておく。日本語の文字体系は極めて複雑で、今日、4つの個別の文字体系—ひらがな、漢字、カタカナ、ローマ字—が混在し、それぞれが独自に語彙的、統語的、談話的機能等を果たしながら使われている。従来からひらがな、漢字、カタカナが主に使用されてきたが、近代以降、国際化の影響等によりローマ字の使用も日常的に急増している。例えば、地名・駅名（例 Chiba, Fukushima, Saitama, Tokushima）のローマ字の併記は駅や路線図では一般的である。製品・商品名の略称として頭字語（AED, ATM, ETC, LED, SE）、団体名（NHK）等に多用される。パーソナルコンピュータのキーボードには、英単語（Enter, Shift, Tab）、やその一部分（Esc, Ctrl, Ins, Del, Fn）、人名（Pikachu, Pokémon）、グループ名（Exile）もサブカルチャーとして登場する。ただし、これらは和製英語であったり、日本語の頭字語（NHK, Nippon Hoso Kyokai）であったり、カタカナとローマ字表記が両方または一方が適宜使われており、一貫してはいない。

2.2 ローマ字教育

一見無秩序とも思える現代日本語の文字体系は、日本語を第二言語として学ぶ外国人学習者にとっては複雑で、彼（女）らにとって学習上の隘路になる可能性がある。ただし、ローマ字についてはヨーロッパ言語話者にとっては、習得上、正の転移が期待できる。また、日常的に文字に接触する機会のある日本語母語話者の年少者にとってすらこの複雑な文字体系を自然環境で習得するのは易しいことではない。他の書記言語と同様に、ローマ字を学校教育の場でフォーマルに学習させる必要がある。小学校におけるローマ字教育の位置づけを見ると、ローマ字の重要性が国の言語教育政策のひとつとして学習指導要領においても明記され、新しい『小学校学習指導要領 国語』では、3年生でローマ字を指導することになり、ローマ字教育が1年前倒しになる。その結果、「外国語活動」と同時スタートになる。

新小学校学習指導要領の関連箇所を詳細に検討するために、『小学校学習指導要領解説 国語編』を見ると、「ローマ字を使った読み書きがより早い段階においてできる」とし、ローマ字教育の早期化を進めている。また、「コンピューターを使う機会が増え」とし、情報教育との関連も示唆している。

ローマ字表記が添えられた案内板やパンフレットを見たり、コンピューターを使う機会が増えたりするなど、ローマ字は児童の生活に身近なものになっている。これらのことから、これまでは第4学年であったものを、今回の改訂では、第3学年の事項とし、ローマ字を使った読み書きがより早い段階においてできるようにしている。「日常使われている簡単な単語」とは、地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のことである。（小学校学習指導要領解説 国語編）

2.3 ローマ字とコンピューター

小学校国語科の解説では、総説で改訂の趣旨として、「ローマ字の指導については、情報機器の活用や他の学習活動等との関連を考慮し、より早い段階から指導する。」こととされ、改訂の要点で、「ローマ字の指導については、情報機器の活用や他の学習活動等との関連を考慮し、従前の第4学年から第3学年に移行している。」と書かれている。

小学校の第3学年及び第4学年の2内容の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕において、ウ文字に関する事項のローマ字の学習では、ローマ字表記の学習を行う。この時に、コンピューターを活用し、ローマ字入力 of 学習を行うことは、今後の情報機器の活用や他の学習活動との関連を考慮して、ローマ字の学習が小学校3学年に位置づけられた意味から考えて、大変重要なことである。(A-1-1/A-1-2)

情報教育においては、「情報手段の適切な活用」の説明では次のように述べ、ローマ字入力を指導することになっている。

まずコンピューターやマウス、キーボードなど入力デバイスの操作、アプリケーションソフトの起動、文字入力、ファイル保存、終了といった一連の基本的操作の能力を身に付けさせる。さらに、必要なソフトウェアを選んだり、保存場所を選択することで情報を整理したりする力も育てたい。なお文字入力に関しては、学習指導要領解説の「国語編」に4年から3年生にローマ字の指導が変更になった理由として「コンピューターを使う機会が増え」と書かれていることから、3年生からローマ字による正しい指使いでの文字入力（タッチタイプ）の指導を行うものとする。

3. ローマ字の方式

3.1 訓令式とヘボン式ローマ字

小学校では現在ローマ字を原則的に訓令式で教えている。そこで、まず訓令式ローマ字について法的根拠である「内閣訓令第三号」（昭和十二年九月二十一日）を確認しておこう。

「ローマ字のつづり方の実施について」

国語を書き表す場合に用いるローマ字のつづり方については、昭和十二年九月二十一日内閣訓令第三号をもつてその統一を図り、漸次これが実行を期したのであるが、その後、再びいくつかの方式が並び行われるようになり、官庁等の事務処理、一般社会生活、また教育・学術のうえにおいて、多くの不便があつた。これを統一し、単一化することは、事務能率を高め、教育の効果をあげ、学術の進歩を図るうえに資するところが少なくないと信ずる。よって政府は、今回国語

審議会の建議の趣旨を採択して、よりどころとすべきローマ字のつづり方を、本日、内閣告示第一号をもつて告示した。今後、各官庁において、ローマ字で国語を書き表す場合には、このつづり方によるとともに、広く各方面に、この使用を勧めて、その制定の趣旨が徹底するように努めることを希望する。

なお、昭和十二年九月二十一日内閣訓令第三号は、廃止する。

昭和二十九年十二月九日

内閣総理大臣 吉田 茂

内閣告示第一号

国語を書き表す場合に用いるローマ字のつづり方を次のように定める。

昭和二十九年十二月九日

内閣総理大臣 吉田 茂

ローマ字のつづり方

まえがき

1. 一般に国語を書き表す場合は、第1表に掲げたつづり方によるものとする。
2. 国際的關係その他従來の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り第2表に掲げたつづり方によつてもさしつかえない。
3. 前二項のいずれの場合においても、おおむねそえがきを適用する。

そえがき

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

1. はねる音「ン」はすべて n と書く。
2. はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に'を入れる。
3. つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
4. 長音は母音字の上に ^ をつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
5. 特殊音の書き表わし方は自由とする。
6. 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお、固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

しかし、「常用漢字表」や「現代仮名遣い」は「ローマ字のつづり方」同様に日本語の書記法を定めた国の規則だが、国の制度上、訓令式ローマ字に統一されているわけではない。次のように旅券法では、ヘボン式ローマ字を採用している。1937(昭和12)年の訓令を改訂し、文部省(当時)がほぼ母音と子音の2文字で構成する訓令式をまとめ、ローマ字を統一した。その後、1954(昭和29)年の内閣告示で現在の訓令式のつづりを正しいローマ字として定める一方、ヘボン式ローマ字の使用も認めた。

(旅券の記載事項)

第五条3

前項の氏名はヘボン式ローマ字によって旅券面に表記する。ただし、申請者がその氏名についてヘボン式によらないローマ字表記を希望し、外務大臣又は領事官が、出生証明書等により当該表記が適当であり、かつ、渡航の便宜のため特に必要であると認めるときは、この限りではない。(旅券法施行規則(平成元年十二月八日外務省令第十一号)最終改正：平成二八年四月二五日外務省令第七号)

(<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H01/H01F03301000011.html> より転載)

ヘボン式ローマ字は、J. C. ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815 – 1911) が考案した。仮名とローマ字を一対一で対応させた最初的方式で英語の発音に準拠している日本語の音の表記法である。ヘボン式は b, m, p の前の撥音と ch の前の促音で変則的な書きかたをする等の特徴がある。

3.2 ローマ字方式の比較

小学校では現在、ローマ字を原則的に訓令式で教えている。しかし、訓令式とヘボン式という若干異なるローマ字方式の狭間で困惑する児童や悩む教師もいる。名前や地名など実際の表記は圧倒的にヘボン式が多く、国際的な身分証明書となるパスポートもヘボン式だ。使い分けに困惑する児童もあり、ローマ字には「ち」を ti と表記する訓令式と chi と書くヘボン式があり、使い分けに混乱する児童もいることから、ローマ字について小中学校の教員から「いつヘボン式を教えればいいのか」「ヘボン式を教えると子どもが戸惑う」「訓令式とヘボン式の2通りあるから子どもが混乱する。学校で教えるローマ字はどちらかに一本化すべきではないか」などの意見がある。そこでローマ字の2方式を比較し、その差を明らかにして、問題点を整理する。参考までに左列半分に音素を IPA で示す。方式により違いがある文字列を太字で示した。

表1 ローマ字方式の比較

音 韻 (IPA)		日 本 語		
子音部	母音部	片仮名	訓令式	ヘボン式
*	[a][ɑ]	ア	a	a
*	[i][ɪ]	イ	i	i
*	[u][ʊ]	ウ	u	u
*	[e][ɛ]	エ	e	e
*	[o]	オ	o	o
k	[a][ɑ]	カ	ka	ka
	[i][ɪ]	キ	ki	ki
	[u][ʊ]	ク	ku	ku
	[e][ɛ]	ケ	ke	ke
	[o]	コ	ko	ko
s	[a][ɑ]	サ	sa	sa
	[ɪ][ɪ]	シ	si	shi
	[u][ʊ]	ス	su	su

	[e][ε]	セ	se	se
	[o]	ソ	so	so
t	[a][a]	タ	ta	ta
	[i][i]	チ	ti	chi
	[ʍ][u]	ツ	tu	tsu
	[e][ε]	テ	te	te
	[o]	ト	to	to
n	[a][a]	ナ	na	na
	[i][i]	ニ	ni	ni
	[ʍ][u]	ヌ	nu	nu
	[e][ε]	ネ	ne	ne
	[o]	ノ	no	no
h	[a][a]	ハ	ha	ha
	[i][i]	ヒ	hi	hi
	[ʍ][u]	フ	hu	fu
	[e][ε]	ヘ	he	he
	[o]	ホ	ho	ho
m	[a][a]	マ	ma	ma
	[i][i]	ミ	mi	mi
	[ʍ][u]	ム	mu	mu
	[e][ε]	メ	me	me
	[o]	モ	mo	mo
y	[a][a]	ヤ	ya	ya
	[i][i]	イ	(i)	i
	[ʍ][u]	ユ	yu	yu
	[e][ε]	エ	(e)	e
	[o]	ヨ	yo	yo
r	[a][a]	ラ	ra	ra
	[i][i]	リ	ri	ri
	[ʍ][u]	ル	ru	ru
	[e][ε]	レ	re	re
	[o]	ロ	ro	ro
w	[a][a]	ワ	wa	wa
	[i][i]		(i)	i
	[ʍ][u]	ウ	(u)	u
	[e][ε]	エ	(e)	e
	[o]	ヲ	(o)	o
g	[a][a]	ガ	ga	ga
	[i][i]	ギ	gi	gi
	[ʍ][u]	グ	gu	gu
	[e][ε]	ゲ	ge	ge
	[o]	ゴ	go	go
z	[a][a]	ザ	za	za
	[i][i]	ジ	zi	ji
	[ʍ][u]	ズ	zu	zu
	[e][ε]	ゼ	ze	ze
	[o]	ゾ	zo	zo
d	[a][a]	ダ	da	da
z	[i][i]	ヂ	(zi)	ji

	[w][u]		ツ	(zu)	zu
d	[e][ε]		デ	de	de
	[o]		ド	do	do
b	[a][a]		バ	ba	ba
	[i][i]		ビ	bi	bi
	[w][u]		ブ	bu	bu
	[e][ε]		ベ	be	be
	[o]		ボ	bo	bo
p	[a][a]		パ	pa	pa
	[i][i]		ピ	pi	pi
	[w][u]		プ	pu	pu
	[e][ε]		ペ	pe	pe
	[o]		ポ	po	po
k	[a][a]	[a][a]	キャ	kya	kya
	[i][i]	[i][i]			
	[w][u]	[w][u]	キュ	kyu	kyu
	[e][ε]	[e][ε]			
	[o]	[o]	キョ	kyo	kyo
s	[a][a]	[a][a]	シャ	sy a	sh a
	[i][i]	[i][i]			
	[w][u]	[w][u]	シュ	sy u	sh u
	[e][ε]	[e][ε]			
	[o]	[o]	シヨ	sy o	sh o
t	[a][a]	[a][a]	テイヤ	tya	
	[i][i]	[i][i]			
	[w][u]	[w][u]	テユ	tyu	
n	[a][a]	[a][a]	ニヤ	nya	nya
	[i][i]	[i][i]			
	[w][u]	[w][u]	ニユ	nyu	nyu
	[e][ε]	[e][ε]			
	[o]	[o]	ニヨ	nyo	nyo
h	[a][a]	[a][a]	ヒヤ	hya	hya
	[w][u]	[w][u]	ヒユ	hyu	hyu
	[o]	[o]	ヒヨ	hyo	hyo
m	[a][a]	[a][a]	ミヤ	mya	mya
	[w][u]	[w][u]	ミユ	myu	myu
	[o]	[o]	ミヨ	myo	myo
r	[a][a]	[a][a]	リヤ	rya	rya
	[w][u]	[w][u]	リユ	ryu	ryu
	[o]	[o]	リヨ	ryo	ryo
g	[a][a]	[a][a]	ギャ	gya	gya
	[w][u]	[w][u]	ギユ	gyu	gyu
	[o]	[o]	ギョ	gyo	gyo
	[e][ε]	[e][ε]			
z	[a][a]	[a][a]	ジャ	zy a	ja
	[w][u]	[w][u]	ジュ	zy u	ju
	[o]	[o]	ジョ	zy o	jo

両方式の差分は、以下のように11種類の音素の表記に現れる。片仮名・訓令式・ヘボン式順に示すと、1) シ si|shi 2) チ ti|chi 3) ツ tu|tsu 4) フ hu|fu 5) ジ zi|ji 6) シャ sya|sha 7) シュ syu|shu 8) ショ syo|sho 9) ジャ zya|ja 10) ジュ zyu|ju 11) ジョ zyo|jo、である。上掲の現場の声(「訓令式とヘボン式の2通りあるから子どもが混乱する」)は12組11種類(zi と ji は重複)のことを言っていることになる。「学校で教えるローマ字はどちらかに一本化すべきではないか」という意見もあるが、一本化のデメリットも考慮する必要があるかもしれない。

4. 英語教育の視点

4.1 英文字(アルファベット)

日本語では、一般的に「アルファベット」(alphabet)という場合、スペイン語、フランス語のようなロマンス系言語や英語、ドイツ語のようなゲルマン系の言語で使われる文字体系を指す。しかし、本来は、① *the Merriam-Webster.com Dictionary* で定義されているように、‘a set of letters or other characters with which one or more languages are written especially if arranged in a customary order’ (Merriam-Webster 2017) であり、特定の言語グループには限定されず、あらゆる言語の文字を指すことができる。また、用語の説明として「言語を書き表すために用いられる一連の文字」(『ロングマン応用言語学用語辞典』1988, 12頁, 「alphabet(アルファベット)」の項)と説明される。実際、日本語の文字は、漢字も含めて英語では Japanese alphabet と呼ぶこともある。

ただし、② Oxford Dictionaries (online) では、A set of letters or symbols in a fixed order used to represent the basic set of speech sounds of a language, especially the set of letters from A to Z. (OUP 2017) としており、さらに、③ Cambridge Dictionary (online) でも、The English alphabet starts with A and ends with Z. (CUP 2017) と、英語に限定されている。日本人が普通、「アルファベット」という場合は、上記②あるいは③の意味、すなわち、英語を中心にヨーロッパ言語の文字という意味で使っている。

また、アルファベットは、「音を表記する個々の文字からなる書記法」(『ロングマン応用言語学用語辞典』1988, 13頁, 「alphabet writing(アルファベット書記法)」の項)であり、現代語としては、「ローマ(ラテン)文字、アラビア文字、キュロス文字」(『ロングマン応用言語学用語辞典』1988, 13頁, 「alphabet writing(アルファベット書記法)」の項)等が使われている。ローマ字は、歴史的には、エジプト文字に起源を持つ西セム系の文字(大名 2014)であると言われ、現在、英語等のヨーロッパ言語やマイクロネシア諸語、スワヒリ語、インドネシア語、トルコ語等の非ヨーロッパ言語でも使われている。従って、英語で使われる26種類の文字以外の文字も「ローマ字」であるが、日本では、「ローマ字」という日本語は特殊な響きを持ち、限定的に使われる場合がふつうである。本稿では、英語の表記に使用される26(52 s)種類のアルファベットを「英語文字」(English Alphabet)と呼ぶことにする。

4.2 「6文字」問題

訓令式であれ、ヘボン式であれ、ローマ字学習が英語文字の学習により効果を与えること（正の転移）が期待できる。しかし、訓令式、ヘボン式のいずれにも使われない英語文字独特の文字が6(12)種類 — Cc, Ff, Ll, Qq, Vv, Xx(大文字・小文字) — ある。英単語として使われる文字だが、日本語の音声表記法であるローマ字についてはいずれも国語教育としては指導上、不要な英文字である。

4.3 小学校英語科における文字指導の重要性

学習指導要領の改訂に伴い、授業改善も求められる。高学年における教科・外国語(以下、英語科)の新設と中学年における外国語活動の前倒しによって、それぞれの教育内容が新たに定められた。特に、英語科では、聞くこと、話すことに加え、読むこと、書くことの指導が求められる。読むこと、書くことの最も基本的な指導は英語文字の指導である。小学校学習指導要領作成の委員を務めた大城賢氏(琉球大学)は、誌上インタビューの中で、新学習指導要領「英語科」における具体的な内容の変更のポイントとして、文字指導の重要性と課題に触れ、以下のように語っている。

高学年の外国語科において、「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」が設定されました。特に、どのように文字指導をすればいいのかというところは、学校の先生にとって大きな悩みだと思います。中学年ではアルファベットの「名称よみ」、高学年では「文字」と「音」の指導です。(中略)どのように意欲付けをして文字に慣れ親しませるかというのは、大きなチャレンジですね。初めて文字に出会う子供たち、どういう指導をしたら文字に興味を持ち、うまく読めるようになり、書けるようになるかという体系的な指導法が確立されていけばよいのですが、音と関係をつかませるような文字指導については、中学校の先生もそれぞれ個人でやっているような状況が多いのです。その結果、子供たちが文字が嫌いになるとか、中学3年生でも文字を読めないというようなことが起こっているケースもあります。ここをどう乗り越えるかが、これから小中連携を通して始まるのではないかと思います。(大城 2017: 2-3頁)

児童や直接指導に当たる小学校教師、保護者等にとっては、教育課程で規定されている以上、日本語と英語の二言語の学習、指導は重要なものであることは疑いない。中学校と異なり、国語教育と英語教育を同じ教師が行うであろう小学校の場合、教師は必然的に二言語の教師であり、中学校、高等学校の英語科教師とは違う視点や指導法が求められる。すなわち、直接的に母語(国語)と外国語(英語)を担当するためにいくつかの短所と多くの長所がある。例えば、小学校教師は英語とその教授法に経験も知識も相対的には少ない点は短所と言えよう。長所として特に重要な視点は母語による教科指導には精通している点が挙げられる。従来、国語科を始め、母語による教科指導には精通している。また、全教科の教育内容を熟知している学級担任のメリットは多い。さらに児童教師間の密接な関係は教科担任制を採る中学校と比べて深い。

また、中央教育審議会総会では、国語教育と外国語教育の役割に触れている。

言葉を直接の学習対象とする国語教育及び外国語教育の果たすべき役割は極めて大きい。言語能力を構成する資質・能力やそれらが働く過程、育成の在り方を踏まえながら、国語教育及び外国語教育それぞれにおいて、発達の段階に応じて育成を目指す資質・能力を明確にし、言語活動を通じた改善・充実を図ることが重要である。」（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」）

加えて、国語教育と外国語教育は、学習の対象となる言語は異なるが、ともに言語能力の向上を目指すものであるため、共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。別紙2-3のとおり、学習指導要領等に示す指導内容を適切に連携させたり、各学校において指導内容や指導方法等を効果的に連携させたりすることによって、外国語教育を通じて国語の特徴に気付いたり、国語教育を通じて外国語の特徴に気付いたりするなど、言葉の働きや仕組みなどの言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促すことを通じて相乗効果を生み出し、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。」（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）（平成28年12月21日中央教育審議会総会））

以上のように英語教育においても国語教育の視点が重要であると言えよう。

5. 文字の認知と基本英単語の英文字構成

5.1 認知研究の知見

本章では、国語教育におけるローマ字と英語教育における英語文字について、認知研究の知見を参照しながら考えてみたい。阿部他（1994）は、「普通に考えれば、構成文字が認知されなければ単語も認知されないはずである。しかし、単語の認知は必ずしもその構成文字を認知した結果起こることとはいえないようである。むしろ、構成文字の認知が単語の認知によって大きな影響を受けることを示す証拠は数多くある。」（36-37頁）と述べている。また、単語優位効果に言及している。「同じ文字であってもそれが単語を構成する場合には、そうでない場合よりも認知されやすい。」（同1994：37頁）しかも、「出現頻度（使用頻度とも呼ばれる）の高い単語ほど認知されやすい」（38頁）として、頻度効果の確実性について説明している。さらに、類似単語効果に触れ、単語としてありそうな文字列の非単語のほうが正しく認知されにくい、とも言っている。さらに、数多くある単語認知過程のモデルの一つである「探索モデル」（Foster 1976, 1979, 1994）では、メンタル辞書内では、形態が似ている単語は1グループとして集められ、そのグループ内で頻度順に配列されていると考えられる（Foster 1954：80-81頁）。

これらの研究成果から得られる実践上の示唆は少なくない。語彙認知とその処理に

において文字の認知がどのように関わっているのかが分かることで、文字指導は文字のみの機械的な繰り返しのドリル練習よりも単語の文字列構成の一部として学習することが大事であることが分かる。次節では、基本英単語がどのような英語文字と文字連鎖で構成されているのかを検証するために、基本英単語リストを使って調査した結果について報告する。

5.2 文字構成率調査

本調査では、基本英単語として CEFR-J Wordlist ver.1.1 の A 1 レベルの単語リスト (投野 2014) を使う。調査結果は図に示した通り、英単語の文字構成は全ての英語文字が等しく出現するわけではなく、文字によって大きく頻度が異なっていることが分かる。まず、e (12.79%) は明らかに突出し、r, a, t, o, i, n, s, l の 8 文字が 7% から 5% 代と中頻度である。そして、頻度順位 23 位以降の 4 字 (j, x, z, q) は 0.3% 未満で極端に出現頻度が少ない。特に、q は僅か 0.07% であり、少なくとも基本単語に出現する文字としては極めてまれな項目となっている。これらの結果は、興味深いことに、前掲のヘボン式のみに使われる文字と共通する部分が多い。

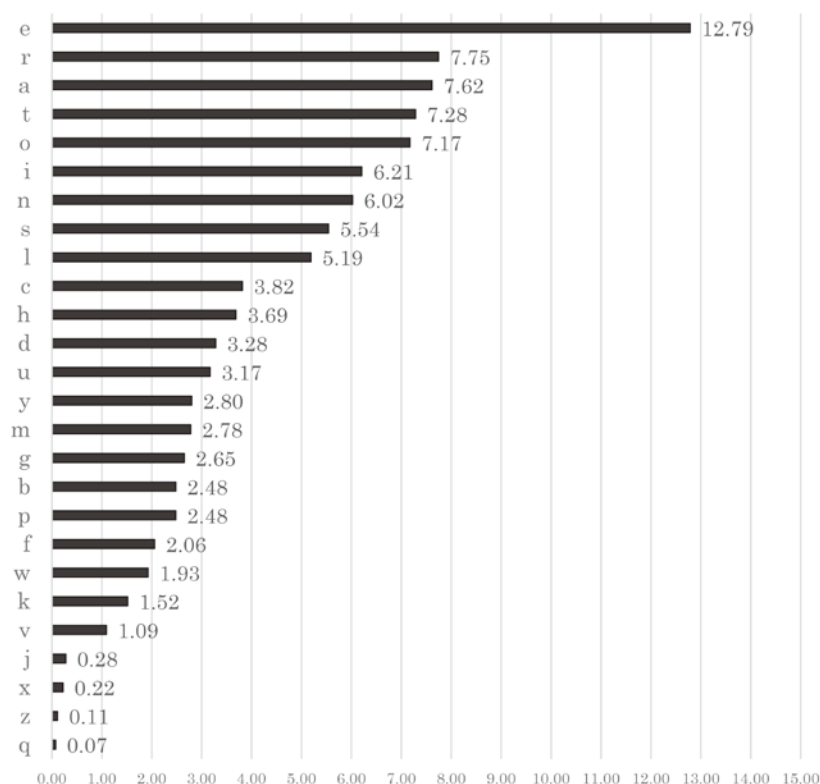


図1 基本英単語 1000 語における英字の構成率 (%)

さらに訓令式ローマ字とヘボン式ローマ字の文字列が同リストの単語にどの程度の割合で出現するのかを調べたところ、ヘボン式のみに出現する文字連鎖は以下の 8 種

類であった。sho(0.104%), ju(0.078%) fu(0.078%), shi(0.052%), chi(0.039%), jo(0.039%), sha(0.026%), ja(0.026%)そして、基本英単語に使われる文字連鎖の全体は40種類未満のわずかなパターンで説明できる。CEFR-J Wordlist のAレベル(1160語)における2文字連鎖と3文字連鎖は1785種類の連鎖がある。それを図2のようなプロファイルで見ると明らかなように40種類の組み合わせまではある程度の頻度で使われるが、それ以降、低頻度で近似する。つまりよく使われる文字連鎖は2%に過ぎないということになる。詳細は資料1を参照のこと。

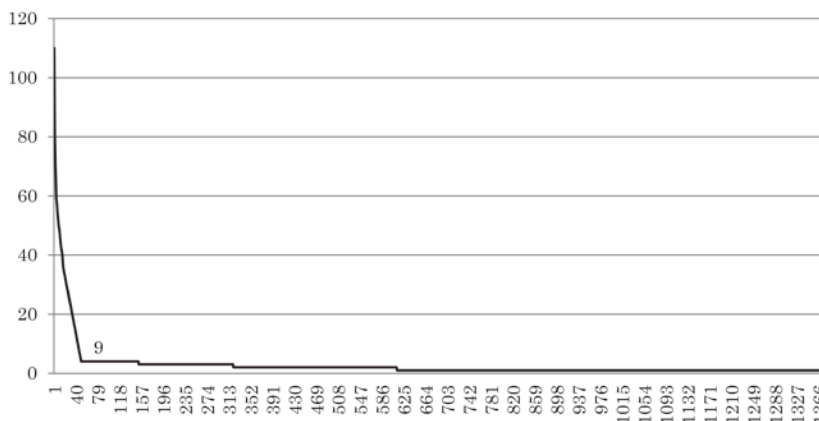


図2 文字連鎖の頻度 (CEFR-J Wordlist A-level 1160語)

5.3 ローマ字の文字連鎖と基本単語

次に、ローマ字(訓令式)の文字連鎖と基本単語における出現状況を見る。59種類の2文字連鎖と、3文字連鎖が出現するが、最も多く基本英単語に出現する文字連鎖はte(0.927%)、第2位はre(0.862%)で、この2文字が顕著である。pu, ya, za, zi, ze, zo, nyo, ryoの8種類は0.013%で、極稀な連鎖である。また、以下のような全く基本英単語には出現しない連鎖もある。

出現しない文字連鎖

ka, ku, ko, yu, zu, kya, kyu, kyo, tya, tyu, nya, nyu, hya, hyu, hyo, mya, myu, myo, rya, ryu, gya, gyu, gyo, sya, syu, syo, zya, zyu, zyo, tsu, shu

表3の「CEFR-J Aレベルの単語と音素(例)」の欄に注目してほしい。ローマ字読みは英語の音素とは一致しない場合が多い。例えば、第1位のte(0.927%)の単語(例)を見ると、tea, contestがあるが、teaのteの部分は[ti:]と発音され、[te]とはならない。一方、contestのteは[te]と発音し、ローマ字読みと同じである。第4位のhe(0.588%)ではheadのheの部分は[he]で、anotherは[:r]、breatheのheは、eの部分は発音されない。そして、heは[hi:]と発音され、[he]とはならない。このように正書法深度の異なる日本語(ローマ字)と英語(英語文字)では、一致しない場合が多いことを理解する必要がある。ただしここではローマ字を基本にして見ているため、フォニックスのように英語文字と英語音の関係とは別の見方である。

表3 ローマ字の文字連鎖と基本英単語における共有

順位	ローマ字の 文字連鎖 (2～3字)	出現率 (%)	CEFR-J Aレベルの単語と音素(例)				
			語頭	中間部		語尾	特徴的な語
1	te	0.927	tea[ti:]	contest[te]		*	
2	re	0.862	read[ri:]	address[re]		re[r]	
3	ne	0.588	near[ni]	business[ne]		airplane[n]	
4	he	0.588	head[he]	another[r]		breathe[黙字]	he[hi:]
5	se	0.562	sea[si:]	baseball[s]		because[z]	
6	ra	0.470	rabbit	afraid		camera	
7	to	0.457	keep	actor		photo	to[tu:]
8	ho	0.431	hobby	chocolate		who	
9	ri	0.431	ribbon	April		*	
10	me	0.418	medicine	remember		become	me
11	ti	0.392	ticket	action		*	
12	be	0.392	beach	December		describe	be
13	ro	0.379	room	apron		*	
14	hi	0.366	hide	anything		*	hi
15	ma	0.353	*	animal		cinema	
16	de	0.353	dear	idea		decide	
17	ke	0.326	keep	basketball		wake	
18	si	0.326	sick	beside		*	
19	ha	0.326	had	chair		*	
20	mo	0.326	mom	famous		*	
21	pe	0.326	pen	expensive		grape	
22	ge	0.287	get	forget		age	
23	bo	0.287	boat	anybody		*	
24	da	0.274	day	birthday	headache	*	
25	su	0.261	sugar	result	usually	*	
26	ba	0.261	baby	basketball	husband	*	
27	so	0.248	soccer	lesson	person	also	
28	ta	0.248	take	potato	restaurant	*	
29	wa	0.235	wait	always	away	*	
30	pa	0.235	page	newspaper	grandparent	*	
31	no	0.209	noise	know	another	piano	
32	po	0.196	post	important	reporter	*	
33	bu	0.183	bucket	album	hamburger	*	
34	ni	0.170	night	evening	finish	*	
35	ki	0.157	kind	smoking	skill	*	
36	sa	0.157	same	message	conversation	*	
37	pi	0.157	picture	topic	hospital	*	
38	tu	0.144	turn	culture	future	*	
39	do	0.144	doctor/ Doctor	pardon	window		

40	mi	0.131	middle	family	smile	*	
41	ru	0.131	rude	true	brush	*	
42	bi	0.131	bicycle	habit	mobile	*	
43	na	0.118	nationality	personal	snake	banana	
44	yo	0.104	young	anyone	everyone	*	
45	gi	0.091	gift	begin	imagine	*	
46	gu	0.091	guest	language	yogurt/ yoghurt	*	
47	hu	0.078	hungry	church	Thursday	*	
48	ga	0.078	game	magazine	again	*	
49	mu	0.065	musician			*	
50	go	0.065	gold			ago	
51	nu	0.052	number	minute	January	*	
52	pu	0.052	push	computer	*		
53	ya	0.013	yard			*	
54	za	0.013				pizza	
55	zi	0.013				*	
56	ze	0.013				size	
57	zo	0.013	zoo			*	
58	nyo	0.013				*	
59	ryo	0.013				*	

※その他の連鎖 sho(8) ju(6) shi(4) chi(3) jo(3) sha(2) ja(2) tsu(0) ji(0) shu(0)

6. 結語

6.1 本論のまとめ

ここで本論の要点を整理し、実践上・研究上の示唆を述べると、1) 訓令式とヘボン式ローマ字の違いは限定的である。(→ 小学校段階におけるローマ字方式の一本化は不要である)、2) 上記1) の違いが基本単語の文字列に現れることは少ない(→ 基本語彙の学習に影響しない)、3) 上記1) と2) の理由により、ローマ字方式の違いが英単語の学習に負の影響を及ぼす可能性は低いと思われる。(→ 実証研究が必要である)、4) ローマ字学習が英語文字の認知に正の転移を起こす可能性は3割程度と予測できる。(→ 実証研究が必要である)

6.2 単語の音声指導

単語や単語の一部の認知と産出を前提として文字の認知がなされ、その後、単語処理、音素とその連鎖を処理する必要があるが、片仮名は文字と音の間に高い規則性がある。一方、英語は相対的に言えば正書法深度が深く、文字と音の間に高い規則性はないため高度な認知能力が未発達な段階の児童が音と文字を一致させることに限界があるのではないか。

ローマ字の学習を通して児童は日本語の音韻構造への知識を深め、英語文字の学習

を通し、英語の音韻構造を目（と耳に）にすることで、日本語と外国語の文字と音に興味・関心を高める。児童の言語への知的好奇心をくすぐり、言語や言葉によるコミュニケーションのおもしろみに気づかせることが大事である。そのためには、外国語教育からのアプローチだけでは不可能であり、母語教育としてのローマ字指導および外国語教育としての英語活動における「文字に触れる活動」との有機的な連携が必要不可欠である。特に、外国語活動や5年生の文字指導以前の音声指導は重要である。小学校5、6年生における語彙指導では、音声で十分に習熟した単語のみを文字提示するのがよい。国語教育と英語教育の葛藤を超える英文字指導は、小学校教師だからこそできる新しい英語教育の一側面であろう。

最後に、交差言語影響の視点から研究上の示唆について述べる。書記エラーの原因は、まず、音韻構造と文字体系の不一致に起因する。文字体系自体の構造的問題もある。調音の問題もある。外国語学習者が目標言語（Target Language, TL）を習得し、使用する場合、その過程と結果において学習者の母語（L1）の影響は看過できない。学習者のL1がTLの習得において複数言語間の違いや類似性が様々な面（音韻、語彙、形態素、統語、正書法等）で影響を及ぼし、その使用において誤用や不自然な使用を引き起こす、L1影響には二面性があり、否定的影響と同時に肯定的影響もある。後者はL1がTLの習得において、複数言語間の言語的特徴が習得に寄与する、というものである。しかし、従来の研究はヨーロッパ言語間の交差言語影響に関するものがほとんどであり（Odlin 1989, Alonso 2016 他）、また文字に関する研究はほとんどない。日本語における英文字の使用環境を考えると、日本人（東アジア）に特有の言語教育研究の課題と言えよう。

資料1 CEFR-J Wordlist Alevel 単語の文字連鎖（頻度10までのみ抜粋）

順位	%	実頻度	文字連鎖
1	1.44	110	er
2	1.08	83	in
3	0.93	71	te
4	0.86	66	re
5	0.77	59	ea
6	0.74	57	on
7	0.71	54	th
8	0.68	52	en
9	0.65	50	le
10	0.64	49	st
11	0.61	47	or
12	0.59	45	he ne
13	0.56	43	se
14	0.55	42	ng
15	0.54	41	ve
16	0.51	39	ll
17	0.47	36	ee el ra

- a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_2_1.pdf
文部科学省 (2017).『小学校学習指導要領』. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf
文部科学省 (2017).『小学校学習指導要領解説 国語編』. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/10/13/1387017_2.pdf
文部科学省 (2017).『小学校学習指導要領解説 外国語編』. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_11_1.pdf
文部科学省 (2017).『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_13_1.pdf
文部科学省 (2017).『中学校学習指導要領解説 外国語編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf
Odlin, T. (1989). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
大名力 (2014).『英語の文字・綴り・発音のしくみ』. 東京: 研究社.
大城賢 (2017).『小学校新学習指導要領ポイント総整理 外国語』. 東京: 東洋館出版社.
Ringbom, H. (2007). *Cross-Linguistic Similarity in Foreign Language Learning*. UK: Multilingual Matters.
投野由紀夫編 (2014).『新しい英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』. 東京: 大修館書店.
吉田裕久・水戸部修治編著 (2017).『小学校新学習指導要領ポイント総整理 国語』 東京: 東洋館出版社.